

平成21年6月4日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18530672
 研究課題名（和文）戦前における古典の入学試験の出題方法とその影響に関する調査研究
 研究課題名（英文）Research on the entrance examination of the Japanese classics before the Second World War
 研究代表者
 内藤 一志（NAITO KAZUSHI）
 北海道教育大学・教育学部・教授
 研究者番号：90217620

研究成果の概要：明治および大正期の中等学校（高等中学校のちの高等学校、高等師範学校、専門学校）の入学試験問題における古典（漢文を除く）領域の出題テキストと設問内容の調査とそれに基づく考察を行った。この時期の出題テキストの主要なものは徒然草と玉勝間である。学校の教科書テキストの掲載頻度と出題テキストの出題頻度を比較すると、近世と中世が中心であることは同様であるが、作品別においては徒然草を除いて異なる傾向を有する。設問内容は当初から口語への文体変換中心であり、その後には大きな変化はない。出題テキストの集中と設問の単一性が、口語訳の記憶中心といった古典学習を生じさせ、後に影響を与えることになったと考えられる。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	400,000	0	400,000
2007年度	500,000	150,000	650,000
2008年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,300,000	270,000	1,570,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：入学試験問題、古典教育、国語教育

1. 研究開始当初の背景

現在の高等学校における古典（古文）教育の最大の問題点は大学入学試験（以下、大学入試）対応を主目的とした内容、すなわち古典文法の習得とその応用としての口語訳能力の習得に偏り、さらにそれが学習者の学習意欲減退につながっていることである。

その根源は第二次大戦以前の入学試験問題（以下、入試問題）にあるのではないかとの発想に立ち、戦前の入試問題を調査することで、入試に起因する古典教育の抱える今日の問題状況の根源的な原因究明と、その解決

のための知見を得ることができるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

国語科教育の古典（漢文を除く）領域との対応を念頭に置き、

(1) 第二次大戦以前の入試における出題に用いられたテキスト（以下、出題テキスト）と設問内容を調査し、その実態を明らかにするとともに、問題点の抽出をおこなう。

(2) その問題点が現在の入試に起因する古典教育の教育課題とどのように関係するのか

を検討し、問題状況改善のための知見を得る。

3. 研究の方法

次の階梯を想定し進めた。

- (1) 入試問題の入手
- (2) 出題テキストの出典調査
- (3) 設問内容の調査
- (4) 戦後との影響関係の検討

上記(1)、(2)は本研究の基礎的な調査であり、かつ次項「研究の成果」と深く関わることから詳述する。

① 収集資料の対象と範囲について

収集する入試問題は、高等教育機関の入り口となる高等学校(中等高等学校、大学予科)、専門学校、高等師範学校、女子高等師範学校を主たる対象とし、参考のためにいわゆる「文検」(文部省師範学校中学校高等学校教員検定試験)関連の資料や大正期以降の大学入試問題も含めた。

しかし、昭和期の資料については、主要調査機関の国立国会図書館では本研究期間内において閲覧不可の措置がとられているものがあり、入手状況が不十分である。このことは、4「研究成果」に述べる考察結果に影響を与えている。ただし、本研究の目的が「戦後との影響関係」をも対象とすることから、限られた範囲内ではあるが入手した昭和期の資料を使用し検討を試みることにした。なお、収集文献数は約140件、その大半がマイクロフィッシュである。

本研究では各学校が実施した入試問題の実物や、学校史を調査対象とはしていない。刊行された受験対策資料を対象とする。主に「入学試験問題集(以下、問題集)」、「受験対策参考書(以下、参考書)」、「進学案内書」である。また、明治40年代以降に相次いで発刊された受験雑誌は、本調査における重要な資料と見込まれるが、本期間内では十分な調査、入手ができていない。これは、本研究において重要な資料群の欠如と認識している。

② 入試の問題文について

上述のように収集した入試問題の資料は「実物」ではない。それは本研究の申請段階で、学校ごとの個別研究ではなく、入試の全体像を把握したいとの意図から、その方法選択を想定していなかったことによる。しかしながらその選択は資料の信頼性について一定の留保が求められることになる。

その理由として、収集資料の調査過程で、同一学校の同一年度の入試問題を掲載する複数の資料を比較対照すると、「ずれ」がある場合が少なくないことが判明した。問題文のテキストレベルの違い、掲載されている問題数の違いなど、とりわけ「参考書」の情報の信憑性については「問題集」との照合から情報が不正確な場合が多いのではないかと

の疑念が生じている。

しかし、「問題集」だけでは入手できない年度があり、また「問題集」が掲載の問題を「参考書」が掲載している場合もあることから、「参考書」の情報をもって補ったものが少なくない。その意味では問題文の「テキストクリティーク」において、課題が残っている。

③ 出題テキストと出典との同定作業

「問題文」つまり出題対象となっている古典テキストの出典についての調査は、本研究にとって主要な項目である。本作業について、「問題集」には出典が明記されていない場合がほとんど(これが「実物」の問題文の記載の実態を反映しているか否かについては判断できない)だが、「参考書」の一部には出典の記載をしているものがあり、貴重な情報源であった。しかし、それが必ずしも正確とはいえない。

例えば、「読史余論」「神皇正統記」「増鏡」「太平記」などは、同一の史実について言及している場合があることが一因なのか、出典記載が混乱している場合がある。また、本居宣長の執筆になるテキストについて、「玉勝間」と「鈴屋集」との間で混乱が見られる。

一方で、本研究報告者(内藤)の調査による出題テキストと出典との同定作業は十分といえず、「不明」状態であるものが100題近くある。なお、この出典不明問題については、本稿報告における統計的な処理対象からは除外している。もちろん、そのことにおいて、統計的な処理、およびそれに基づく見解が、「誤謬」を含んでいる可能性があるだろう。

4. 研究成果

(1) 明治、大正期の入試問題の調査結果

上記3の①に述べた制約のなかでの調査結果の概要をいくつか示す。

① 問題延べ数：541件(内、大正期346件)

② 出題校数：74校

学校によっては出題件数に開きがある。例えば高等学校79件、高等師範学校48件、専門検定39件のように件数の多いものから、盛岡高等農林学校のように2件のものもある。これは古典の出題が少なかっただけでなく、実施したとしても収集資料に未掲載である可能性もある。

なお、高等学校、陸軍士官学校と陸軍経理学校、海軍兵学校と海軍経理学校、海軍機関学校については、学校別出題の時期は、1学校ごとにカウントした、つまり7校が出題してあれば7回カウントしてある。

また、第一高等中学校と第一高等学校、桐生高等染色学校と桐生高等工業学校のように後継関係があきらかな学校は別学校とし

てカウントをしていない。

③出題件数の多い作品：ここでは2桁以上の出題数をもつ散文作品について、作品名、出題件数(カッコ内の「t」は大正期の出題件数)を記す。

徒然草143(t88)、玉勝間 34(t25)*鈴屋集8(t4)、菅笠日記2(t2)、石上私淑言2(t2)、その他2(t1)、を加えれば本居宣長作品は計48(t34)となる。平家物語33(t27)、増鏡 32(t25)、神皇正統記 29(t17)、花月草紙24(t17)、駿台雑話24(t9)、方丈記14(t12)、樞園文集13(t11)、保元物語12(t6)、太平記11(t5)

なお、後述(2)、②に関する情報として、雲萍雑誌1(t0)である。

④設問のパターン

基本的には口語訳である。以下、典型的な設問例を示す。

- ・傍線ヲ附シタル語句ノミヲ解釈せよ。(東京高等師範)
- ・左の文を解釈せよ(長崎高等商業)
- ・右の文章の大意を述べ且傍線を附せる字句に漢字を当て嵌むべし(小樽高等商業)
- ・左ノ文章を平易ナル口語ニテ解釈セヨ(高等学校共通)

(いずれも、萬福直清『大正式年度各官立学校入学試験問題集覧』東京出版社、大正2による)

(2)調査結果より抽出される問題点

①出題テキストの集中

出題テキストが(1)、③の諸作品、特に「徒然草」に集中している。そしてそれらの作品の場合、同一箇所が出題される場合も少なくない。近接した年度で同一学校から同一箇所が出題されるという極端な場合もある。

この状況は集中する出題テキストの口語訳を覚えることで対応しようとする機運を招くことを容易に想像できる。

受験対策メディアは明治40年代から急増するが、対応の仕方も変化が生じる。「参考書」の動向を見てみると、たとえば、佐藤仁之助『受験参考国語漢文要語詳解』(東亜堂、明治38)のような入試問題に出る作品の用語解説レベルのものから、吉川秀雄『高等諸学校受験参考国語精義』(文洋社書店、大正4年)のように、「従来の入学試験の国語の問題は増鏡、徒然草、の二書が最も多く、ついでは平家物語、方丈記、神皇正統記、太平記等から出るのが多かつたように思ふ」との認識から、増鏡と徒然草に限定して、既出箇所を中心に語釈と通釈をほどこしたものが登場し、さらには光藤泰次郎『国語精解受験参考』(光世館書店、大正8)のように、「本書は徒然草、増鏡、神皇正統記、駿台雑

話、方丈記、保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記、太平記、土佐日記、十六夜日記、東関紀行、玉勝間、花月草紙、奥の細道、近世名家文(略)前掲の諸書より出でたる官立学校入学試験問題は最近十五年間のものを網羅せり」といった網羅主義に基づいて、既出箇所の通釈をほどこしたものも現われる。

これら「参考書」の編集方針は、既出の出題テキストの口語訳の需要が高かったことの反映であり、またその暗記が入試対策として有効な方法であったことの証左であろう。

ただし、これが大正10年代になると、塚本哲三『改訂新版国文学び方考へ方と解き方』(考へ方研究社、大正12年)のように、基本的な文構造を説明しつつ、それを具体例に適応させるといった、応用範囲を広げようとする参考書が登場するようになる。これは、「他人の或る一つの正解を無理々々暗記するやうな態度は(中略)最も排斥するところ」によるものだが、既出テキストを覚えることに限界が来ていることを示唆する。それは背景に出題テキストの拡大が想像されるが、調査済みの入試問題では顕著な拡大状況は認められなかった。

②出題テキストと学校テキストとの関連

ハルオシラネ・鈴木登美『創造された古典』(新曜社、1999)は、明治期において新設された国文学研究における国文学史という研究的観点から、明治期以前のテキストが古典テキストとして編成されたとする。同書中、ハルオシラネは学校の教科書が「古典」を形成する主要メディアであったことを指摘する。では、出題テキストはそれらの教科書掲載テキスト(以下、教科書テキスト)とどのように関係するのかを検討した。

ここでは、概況を把握するために、田坂文穂『旧制中等教育国語教科書内容索引』(教科書研究センター、1984)に依拠し、明治期の男子用教科書に掲載された「表題数」をもとに、テキスト別にカウントすると、散文作品の上位10作品は以下のようになる、

徒然草298、太平記252、駿台雑話172、源平盛衰記167、神皇正統記152、平家物語145、増鏡132、藩翰譜118、雲萍雑誌99、常山紀談94、

以上の上位群とはやや開きがあるが、玉勝間61、花月草紙59、方丈記57、読史余論57、土佐日記56となる。

これらを(1)、③の出題テキストと比較してみると、近世、中世テキストの重視という傾向で共通することが指摘できる。

一方で作品別にみると、その傾向に一致しない

a: テキストで多く採用される割には試験で採用されないもの

b: テキストで比較的少ないのに試験で採用されるもの

といったものが見出せる。具体的にはaは雲萍雑誌、藩翰譜、常山紀談、bは玉勝間であろう。

このようになった理由として、主に2点が考えられる。

- ・文体的な観点から、和文系は玉勝間、漢文訓読系は徒然草を代表させて採用した

- ・内容的な観点から、歴史的な内容は増鏡や神皇正統記を採用した

上記の観点には、個々の作品でなくてはならない理由、すなわち作品がもつ「思想」という観点が無い。八木雄一郎『『国語』と『古文』の境界線をめぐる対立』（『国語科教育』第61集、2007）によれば、古典は明治35年の中学校教授要目では、近世と中世が、文体習得の観点から採用され、一方で中古、上代は「国文学史」として扱われることになり、さらに「国文学史」は日本人の国民性を学ばせることを企図していたとする。とすれば、教科書テキストの役割には「思想形成」があったことになる。

このことを踏まれば、ここに教科書テキストと出題テキストの違いについて、ある仮説を提示できる。つまり、出題テキストにとって「思想形成」的観点は後退し、口語訳技能の検出が主要目的であったというものである。それは、(1)、④に示した設問の内容が口語訳に偏っていることと一致する。神皇正統記に「思想形成」の役割があったことを指摘することは容易だが、設問内容は口語訳であることから、直接的に関わると判断することは難しいだろう。

ただし、明治40年代に入り、特に陸軍、海軍関係の学校において、それまで漢文と悪文のみの出題であったのが、古典としての国文を出題することになったのは、「国民性」形成の具として機能することが定着、あるいは促進されていると見ることも可能で、なお今後の考察を必要とする。

③出題傾向と試そうとした言語能力について

甲斐雄一郎『国語科の成立』（東洋館出版、2008）によると1890年以降の国語教科書は、当時形成過程にあった「国語」を書くためのモデルとなるテキスト選択がなされ、従来の漢文体に対して和文体を、さらには和文体のみにこだわらない、ひろく漢字かな交じり体として形成された「国語」に対応していくこと、その過程において、和漢混交文体が「規範」のひとつとして機能したことを指摘するが、新井白石の文章、源平盛衰記、徒然草などの和漢混交文体が、その「国語」形成に適合するテキストであったことは言うまでもない。一方で、本居宣長を代表とする国学系の和文体テキストも多く採用され、近代における「国語」の文体形成において和文体と漢文訓読体のせめぎあいの様相を確

認できる。

では、入試において古典は文体形成の学習成果を試すものとして出題されたのであろうか。受験者の文体獲得を確かめるに最も適しているのは、実際に文章を書かせることであろう。

明治大正期において、漢文と作文は国語関連の入試科目としてはほぼ必須であり、とりわけ明治の20-30年代においては顕著である。そこにおける作文の出題は、まさしく文章作成者に「内容」すなわち「ジャンル」とそれに適合する「文体」を意識化した要求に重きが置かれている。

- ・友人の支那に遊ぶを送る序（明治27 陸軍士官学校）

- ・士気は国家の元気たる論（同上）

- ・我邦に於て工業の拡張を必要とするの理由を論ず（明治27 東京工業学校）

（いずれも、黒川俊隆『東京遊学案内』少年園、明治28による）

友人の外国旅行の送別のための文章と、国民の意欲がすなわち国家の意欲であることを論ずる文章では、その文章構成だけでなく、ふさわしい文体を要求する。

一方で、古典については「口語体」の解釈が求めるのみで、文体獲得状況を検出するのは作文のほうであったと思われる。

なお、齋藤希史『漢文脈の近代』（名古屋大学出版会、2005）によると、明治10年に刊行された『穎才新誌』が、当時の学齢期にある子供たちによる「今文体」の発表の場であり、子供たちによる文体習得に機能したことするが、それと上記の入試における課題作文とを関連させて検討することも必要だろう。

④欠落している昭和期について－設問内容の変化の可能性－

石川巧は『「国語」入試の近現代史』（講談社、2008）において、現代文を対象とした入試においては単なる文章中の語意や文意、大意を答える設問が、昭和に入って、文章の思想や文章に対する批評を答える設問へと変化し、昭和10年代には定着したとするが、上記3で述べた事情により資料収集が不十分であり、古典の場合は確認ができていない。

また、宮崎晴美『実力完成受験国語』（清水書院、昭和25）によれば、昭和24年に実施された戦後初めての大学入試は「近世の雅文が少なく俳文が多くなった。従って芭蕉や也有や去来なども現れた。また中古の文では、「源氏物語」「枕草子」が非常に多く引用されているのは、従来と変わらない点である。近古では依然として「徒然草」が多く、「十訓抄」なども少なくない」とする。

この二つの発言は出題テキストと設問内容について、戦前昭和期が大正期までとは状

況が異なっていることを予測させる。それについては報告することができないが、大正期以降、文学部、法文学部、医学部を中心とした大学入試における古典の出題を見るとある程度の推測はできそうである。三浦圭三、小和田武紀『最近十カ年官立大学国語漢文入学試験』（有精堂、昭和11年）によると、古典の散文テキスト総数55題のなか、源氏物語10、枕草子7、徒然草5、大鏡4と、中古のテキストが中心となる。

さらに、問題も

・次の文中に筆者の性格が如何に現れて居るか（紫式部日記、東北大学法文学部、大
・左の詩を解釈しかつ批評せよ（万葉集、東京帝国大学文学部大正14）

（いずれも、北辰書院編、『帝国大学入学試験問題集』北辰書院、大正15による）
といった、単なる口語訳にとどまらない設問が散見し、石川の指摘した現代文と同様の設問は、上位学校の大学入試の段階で出現していたとの推測が可能と思われる。

(3) 戦前期入試の戦後への影響

① 「口語訳の暗記」中心の学習

昭和24年に文部省内国語教育研究会が著した『高等国語はいかにして学ぶか 高等国語第一学年用上』（かすみ書苑）が、「国語科の勉強が、難語句を暗記したり、古典の通解を記憶したり、辞書だけにたよっていた時代は、とうに過ぎてしまった」と記していることは、むしろ、(2)、①で指摘した、「覚える古典」は基本的には定着していたことを裏付ける。「覚える古典」、すなわち既出作品の口語訳の暗記を主目的とする学習は、既習テキストが出題される試験への対応という点で、戦後の学校の定期試験対策に共通し、戦後の学校教育における古典学習への影響を見ることができる。

② 学習の到達点としての「口語訳」

学校教育においては文体創出や思想形成としての学習機能をもたせながら、入試問題においてどちらも検出することを行わず、口語訳で対応可能な設問内容は、上位学校進学を主目的とした場合の学習に大きな影響を与える。古典の学習において日常の学習と入試に向けての学習の乖離が戦前より生じ、戦後においてもそれが継続していると言える。

(4) 本研究が戦後の古典教育の教育課題解決に与える示唆

入試の設問内容が口語訳中心であったことは、一見、古典が読解対象としてあり、文体創造とは深く関係しないようにも思われるが、甲斐（前掲書）が指摘するように当時の作文教授が、読むことと連動し、書く前にまず読むことが行われていたということと関連させると、文体変換自体が、文体創造に

寄与しているともいえる。

口語訳は、古典テキストの内容理解の到達度を文語を口語に置き換えることによって判定するというだけではない。それとは異なるレベル、口語訳を目的としつつもそれ以前に古典の言葉を口語との関係を探りながら表現者の中で考えることになる点に着目したとき、古典の学習の可能性が見出せる。

それは異なった表現と比較することで現代語を対象化する行為であり、またその連続が、学習者の思考や表現を省察させることを促す可能性をもつ。

現在の作文指導においても読むことと連動させた指導が行われているが、テキストの話題や素材内容に関心をもたせて、それと関連した事柄を表現の題材としたり、文章形式を模倣するためのサンプルとして提供する授業が中心であって、それは上記の文体創造や学習者自身の言葉を省察促す学習とは異なる。単純な題材への意欲喚起でもなく、また文章構成模倣でもない、益田勝美「〈内なる言葉の国〉建設のために」『国語通信』第216号、1979ほか）がのいう「内言」を豊かにすることにつながる行為と言う観点からのアプローチとなると考えられる。

先行するテキストを読むことによる言葉の蓄積が、文体創造の基盤となるという明治期の発想自体は古典の学習にとって重要である。

問題は、その学習成果を試す方法が、入試において案出できていないことにある。

(5) 今後の課題

本研究期間において、到達できなかった以下の4点を挙げる。

- ・昭和戦前期の資料の収集
- ・出題テキストと出典の確実な同定作業
- ・古典教育の教育内容についての根源的な問題の究明としての「口語訳化」について、その機能の抽出。
- ・出題テキストと思想形成との関連性の検討

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

内藤 一志 (NAITO KAZUSHI)
北海道教育大学・教育学部・教授
研究者番号：90217620

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし